

H. D. ソーロウの経済観

富 永 和 元

I

H. D. ソーロウ (Henry David Thoreau 1817~1862) は、彼のウォルデン池畔での独居生活を『ウォルデン—森の生活』(*Walden, or Life in the Woods*) という一冊の本にして出版した。この作品はただ単に、ソーロウのウォルデン池畔での生活記録というだけにとどまらず、彼の社会に対する考え、また彼の愛した自然への思いがちりばめられた随筆でありアメリカ文学史上に残る傑作として今日に読み継がれている。

この作品は、全部で18章から成りその第一章は「経済」‘Economy’の章で始められ、その分量は一番多く『ウォルデン』全ページ数の約4分の1にも及んでいる。自然をこよなく愛し、精神性を重んじた超絶主義者ソーロウはその作品の第一章を「経済」で始めた。この「経済」の章は内容的に4つに分類することができる。

- ① 自己の生活を見つめなおす目
- ② 衣・食・住について考えること
- ③ 自らのウォルデン生活
- ④ ありのままに真実に生きるということ

①は序章的な部分であり、人間生活に対するソーロウの考え、意見が述べられている。②③については衣・食・住という人間が生活するうえで必要不可欠なものに対してのソーロウの意見、言い換えれば彼独自の具体的な「経済」に対する考えを見ることができる。そして④はこの章を通してのソーロウの考え、思想であってまとめの部分である。そのような「経済」を第一章にもってきて

いることは、興味深いことであると同時に疑問に思われることでもある。ソーロウははたしてこの「経済」の章で何を言おうとしているのだろうか、そしてソーロウの言う経済とはどのようなものか。以下では『ウォルデン』の「経済」について考えながら、ソーロウが言う経済とは何か、また、彼はどのようにこれを最初にもってきたのかを明らかにしながらソーロウの経済観について考察してみたい。

ソーロウの時代のアメリカ経済はイギリス産業革命の影響を受け、ニューイングランドおよび東部諸都市での木綿工業を中心にした工業化とペンシルヴェニア州西部を中心とする製鉄工業を軸にしたいわゆるアメリカ産業革命の時代であった。そして河川補修、運河および有料道路建設につぎ鉄道網も急速に整備されていった。経済は発展し、大量生産・大量消費の波が押し寄せてきたのである。この時代のアメリカ国民の多くはこうした経済発展を喜び、より豪華な家に住み、よりうまいものを食べ、より美しい衣装を身につけるために働いた。経済は物質中心主義になり現代的経済意識へ変わっていった。こういう時代にソーロウは生きた。彼はその社会をみて「わたしはコンコードをずいぶん歩きまわったが、店にしる事務所にしる畠にしる、いたるところで、住民は百千のやり方で苦行をしているように思えた」¹⁾と言い、またバラモン教徒の数々の苦行を挙げ、「一そういった自分からすすんでする苦行の姿でさえ、私が日々に目にする光景ほど信じがたく、驚くべきものではほとんどありえない」²⁾と言った。アメリカ国民が求めているものすべてがソーロウにとって不要なもので、それを得るために人々がしている労働は彼の目には苦行にしかうつらなかった。彼には親から相続した畠や家畜や農具などは手に入れるよりも、それから免れる方がむずかしい不幸にしか思えなかったし、そんな不要な世襲によって人生を送ることは愚か者の生涯だと考えた。ソーロウはまた、アメリカ人の生活をこう言っている。

Most men, even in this comparatively free country, through mere ignorance and mistake, are so occupied with the factitious cares and superfluously coarse labors of life that its finer fruits can-

not be plucked by them. Their fingers, from excessive toil, are too clumsy and tremble too much for that. Actually, the laboring man has not leisure for a true integrity day by day; he cannot afford to sustain the manliest relations to men; his labor would be depreciated in the market. He has no time to be anything but a machine. How can he remember well his ignorance—which his growth requires—who has so often to use his knowledge?²⁸⁾

ソーロウは多くのアメリカ人は単なる無知と誤解から、人生を人為的苦労と余計な原始的労働によって無駄に過ごしていると考えた。そして、それは機械以外の何物でもないと言った。またある者は上着や靴の代価が支払えずに借金し、それから抜けだすためにもがき苦しんで、結局支払うことができずに死んで行くのだと述べている。そして自分たちが社会の奴隷として使われないように気をつけろと警告している。彼は自分の生活をもう一度見なおしてみろと訴えているのだ。そこにはソーロウのその時代に反抗する精神がある。どうして人は人間らしく生きられないのか、経済的富や物質的豊かさにとらわれすぎて人間本来の生き方を忘れ、経済のために働く機械に成り下がっている人々に対するソーロウの思いが記されている。彼はまた「大衆は静かな絶望の生活をおくっている」⁴⁾と言い「型にはまった、無意識の絶望は人類の遊戯とか娯楽とかいわれているものの下にさえ隠されている」⁵⁾と言って人々の絶望の深さについて述べ、それに陥らないためには「だが、絶望的な事をしないのが知恵の特色の一つである」⁶⁾という考えを記している。では「絶望的な事」というのはどのようなことであろうか。これは精神性を忘れた機械的な生活であり、ソーロウの言う「愚か者の生涯」である。彼は次のように述べている。

I have lived some thirty years on this planet, and I have yet to hear the first syllable of valuable or even earnest advice from my seniors. They have told me nothing, and probably cannot tell

me anything to the purpose. Here is life, an experiment to a great extent untried by me; but it does not avail me that they have tried it. If I have any experience which I think valuable, I am sure to reflect that this my Mentors said nothing about.⁷⁾

ここにはソーロウの個人主義がある。彼にとっては人々の助言は価値あるものではなかった。先輩たちの人生への試みは彼にとっては何の益にもならなかった。彼は自分の目で見えて考えそして行動する「自己の生活を見つめなおす目」を持たなければならないと言っている。

これまでソーロウの生活に対する視線を見てきた。以下では彼独自の具体的衣・食・住に対する考えを見てみようと思う。

Ⅱ

ソーロウは人間が生活するための必要物について次のように考えた。「多くの動物にとっては生活の必要物は一食物—だけしかない。」⁸⁾ また「動物はすべて食物とかくれが以上のものを必要としない。」⁹⁾ そして「——動物の生命という言葉は、動物の熱という言葉とほとんど同意語であることがわかる。なぜならば、食物はわれわれの体内の火を保持するための燃料と見なされうる——そして燃料はその食物を調理するため、もしくは外部から加えることによって、われわれのからだの熱を増す役をするだけである——が、住居と衣服もこうして発せられ吸収された熱を保持する役をするだけだからである」¹⁰⁾ としている。動物にとって必要なものは熱をつくる源となるものと、その熱を保つものだけであり、人間も動物であるならばそれ以上の何を必要とするのかとソーロウは考えるのである。そして、それ以上のものはすべて贅沢品にすぎず、すべて不必要なものであると言っている。

Most of the luxuries, and many of the so-called comforts of life, are not only not indispensable, but positive hindrances to

the elevation of mankind. With respect to luxuries and comforts, the wisest have ever lived a more simple and meagre life than the poor. The ancient philosophers, Chinese, Hindoo, Persian, and Greek, were a class than which none has been poorer in outward riches, none so rich in inward. We know not much about them. It is remarkable that *we* know so much of them as we do. The same is true of the more modern reformers and benefactors of their race. None can be an impartial or wise observer of human life but from the vantage ground of what *we* should call voluntary poverty. Of a life of luxury the fruit is luxury, whether in agriculture, or commerce, or literature, or art.¹¹⁾

ソーロウは贅沢は人類向上の妨害物であるとさえ言う。そして、簡素な生き方の賢さを説く。彼は複雑な経済（物質）中心主義の生活から、単純な自然生活への移行を目指している。彼は個人主義者であるので、この盲目的で贅沢な経済社会を批判こそしているが、何かを示唆しているわけではなく自分は規範を押し付ける気はないと言う。ソーロウの目的はあくまで自分の自然生活であり、それを通しての内面の豊かさであった。「いかにも、太陽がのぼるのを私は決して大して手助けしなかったのは事実であるが、疑いもなく、ただそれに立ち会うということがこの上もなく重要なのであった」¹²⁾ というのは自然に生きようとするソーロウの考えを端的に表わしているだろう。彼がウォルデン池に赴いたのは次のようなことからであった。

Finding that my fellow-citizens were not likely to offer me any room in the court house, or any curacy or living anywhere else, but I must shift for myself, I turned my face more exclusively than ever to the woods, where I was better known. I determined to go into business at once, and not wait to acquire the usual capital, using such slender means as I had already got. My pur-

pose in going to Walden Pond was not to live cheaply nor to live dearly there, but to transact some private business with the fewest obstacles; to be hindered from accomplishing which for want of a little common sense, a little enterprise and business talent, appeared not so sad as foolish.¹³⁾

ソーロウにとっては世間並の資本など関係ないものであり、自分のよく知る自然の森こそが重要なものに思えた。それは自分自身を複雑から単純へ、物質社会から自然へと移行するという目的によるものだった。

衣服について彼は「われわれは上衣やズボンはたくさん知っているが、人間そのものは少数しか知らない。君の最後の工面をして案山子に着物を着せ、君はしょんぼりそのそばに立って見たまえ、誰だって案山子の方にまず挨拶しないものがあるか？」¹⁴⁾ と言い「何かすべき仕事をとうとう見出した人は、それをするために着る新しい服を手に入れることを必要としないだろう。いつからともなく屋根裏ではこりにうもれていた古いやつで結構である」¹⁵⁾ と述べている。ソーロウにとって衣服とは熱を保つための道具であるから、それにとらわれることは彼にとって愚かなことであった。人生をいかに生きるかという目的こそ彼にとって重要なものであったので「パリの頭猿が旅人の売り物の赤帽子をかぶるとアメリカじゅうの猿がみんなそのまねをするのだ」¹⁶⁾ とユーモアたっぷりに物質、流行に執着する人間を皮肉っている。

住居についてソーロウは「住についていえば、わたしはこれが今では生活の必要物であることを否定はしない」¹⁷⁾ と住居の必要性について認めているものの「だが、もし人が住宅を建てようというのならば、——いつのまにか自分が家ではなくて工場とか、手がかりのない迷宮とか、博物館とか、養育院とか、監獄とか、堂々たる霊廟とかにはいりこむことにならないように気をつけるべきだ」¹⁸⁾ と言っている。彼にとって住居とはやはり熱を保つためのもの以外の何ものでもなく、住居に他の付加価値は不要であった。より単純な生活へ、より自然な生活へとソーロウの目は向いていた。そこには物質の豊かさは必要ではなかった。彼は精神の内面的豊かさ、機械ではなく人間としての満ち足りた

生活を求めて森に入った。彼にとっての経済生活とは生きていくために必要な最小限の物質をどのようにして得るかということだけで、あとはどうでもいいことであった。そして近代の住居を野蛮状態のそれと比較して次のように言っている。

In the savage state every family owns a shelter as good as the best, and sufficient for its coarser and simpler wants; but I think that I speak within bounds when I say that, though the birds of the air have their nests, and the foxes their holes, and the savages their wigwams, in modern civilized society not more than one half the families own a shelter.¹⁹⁾

ここにはソーロウの近代文明のあり方への疑問が述べられている。人間の住居とは鳥の巣や、狐の穴と同じものであると彼は考えた。しかし文明社会の人間で自分の住宅を持っているものは半数以上にもならない。それなのに生きて行くのに十分な住居を持っている野蛮状態の人間よりもはたしてすぐれているといえるのか。本当に文明は進歩しているのか、物質を追いかけることにのみ心血を注ぎ、かえって人間は自分の首を絞めているのではないかとソーロウは自分たちの現在の社会、そしてその経済について考えた。彼は文明が人間生活の真の進歩ならば、文明は一層良い住居を一層安価で建設できると証明すべきだと述べている。そして仮に人が自分の家を手にいれても、この社会において彼がそれを自分のものにするための労働の過酷さを考えるならば、それは家を手にいれたのではなく家という厄介者に彼がつかまったのだとソーロウは考えていた。文明の進歩と住居とについて彼は次のように自分の考えを述べている。

Granted that the *majority* are able at last either to own or hire the modern house with all its improvements. While civilization has been improving our houses, it has not equally improved the men who are to inhabit them. It has created palaces, but it

was not so easy to create noblemen and kings. And *if the civilized man's pursuits are no worthier than the savage's, if he is employed the greater part of his life in obtaining gross necessities and comforts merely, why should he have a better dwelling than the former?*²⁰⁾

彼は文明とは物質に満たされた生活を送ることではないと考えていた。それにふさわしく人間は精神的に進歩しなければならず、それをしない文明人と呼ばれる人間が未開人より上等な家に住む理由はないとソーロウは思っていた。「たいていの人間は家とは何であるかを一度も考えたことがないらしく、自分も隣人たちがもっているようなやつをもたなければならぬと考えているがゆえに生涯、そうする必要がないのに、現実には貧乏しているのである」²¹⁾と社会の住宅に対する思い違いを指摘し、そしてさらに次のように言った。

Though we are not so degenerate but that we might possibly live in a cave or a wigwam or wear skins to-day, it certainly is better to accept the advantages, though so dearly bought, which the invention and industry of mankind offer. In such a neighborhood as this, boards and shingles, lime and bricks, are cheaper and more easily obtained than suitable caves, or whole logs, or bark in sufficient quantities, or even well-tempered clay or flat stones. I speak understandingly on this subject, for I have made myself acquainted with it both theoretically and practically. With a little more wit we might use these materials so as to become richer than the richest now are, and make our civilization a blessing. The civilized man is a more experienced and wiser savage.²²⁾

このソーロウの言葉は彼にとっては間違った方向へ進んでいる文明社会の経済に対する大きな批判である。

ソーロウは「経済」の章のなかで自分の森の生活を語りながら、もっと靈的な生き方を始めよう、自然は自分たちの敵ではなくむしろ友達であると述べている。そして人間が家を作る理由とは何か、また本当の家とはどんなものかと考え、人間が自分の手で自分の家を作るならば、ちょうど鳥がそうするときにもいつも歌うように詩的才能が発揮されるだろうと言い、しかし自分はそんな簡単で自然な仕事をしている人を見たことがないと言っている。自分の住居をつくることを他人任せにしている人間に対して、そうではないだろうと考え、労働の分割はどこまでいくのか、そうすることが何の役に立つのかと問い直している。ソーロウはできる限り自給自足の生活をするを旨とした。そしてウォルデン池畔に自らの手で自分の必要とする住居を築いた。彼は自分で築いた森の中の家こそ、自分の求める靈的な生き方をするのにふさわしい場所であると考えた。また人が単純な生活をして自分が作ったものだけを食べ、自分が食べるだけのものを作るならば、人間はもっと自由に、もっと人間らしい生活が送れるだろうと考えていた。そして「わたしはいつも、人間が家畜のもちぬしであるよりも家畜の方が人間の主人であり、家畜の方がずっとより自由であると考えている」²³⁾と言い「たしかに、すべての点において単純な生活をする国民——哲学者である国民は、動物の労働を使用するなどという大きな過ちを犯さないであろう」²⁴⁾としている。ソーロウにとっては、自由に生きていると思われがちな文明社会の人間こそが実際は、家に、畠に、そして品物に縛られているように見えた。多くの人々が贅沢で無益な仕事に精を出し、強者の奴隷になってしまっていると考えた。ソーロウにはあくせく働く文明人たちが、作業場で仕事をさせられている牛や馬と同じように見えていた。彼は「多くの人間は西洋や東洋の記念物を気にして誰がそれを作ったのか知りたがっている。わたしとしてはその当時誰がそんなものを作らなかったかが知りたいのだ——誰がそんなものを超越していたかを」²⁵⁾と自分の物質に対する価値観を述べている。そんな物質を超越した精神こそがソーロウの目標でありウォルデン生活の目的でもあった。

「経済」の章では何に何ドルとか、何々に何ドル何セントとかいうように彼の独居生活をより具体的金額を挙げて説明している。ソーロウは人間が自然の中

で、より人間らしく精神的に生きるにはこれだけの金があれば充分だと言っているのだ。贅沢な住居、衣服、食事を手に入れるために経済の奴隷になって人生を過ごして本当に幸せなのかと問うているのである。「人はしばしば必要物の欠乏からではなく贅沢品の欠乏から死ぬような境涯におちいつている」²⁶⁾ という言葉は彼のその思いを如実に表わしている。そして「人間は他のどの動物よりも、すべての気候や境遇に自分自身を適応させることのできるものである」²⁷⁾と人間の適応能力について述べ、「すべてのニューイングランド人はこのライ麦とトウモロコシの土地で自分自身のパン材料を全部わけもなく作ることができ、そのためには遠方で、変動のある市場に依存する必要はない」²⁸⁾ と言い「大部分の農夫は自分で作った穀物を牛や豚にやり、少なくとも一層滋養に富んでいない小麦粉をより高い値段で店から買っている」²⁹⁾ としている。ここからは人間とはどんな境遇でも生きていけるのだ、特にニューイングランドの人間は自分の土地で自給自足の生活を送ることができる、それなのにどうして自然の中で人間らしい生活をしようとししないのだ、より精神的な生活をしないのだ、というソーロウの考えが伝わってくる。

以上のように『ウォルデン』の「経済」は一般に言う経済とは違うことを論じているようだが、これがソーロウ独自の経済観であった。彼にとって「経済」とは自分が精神的生活をするための最小限の必要物であった。

Ⅲ

ソーロウは自分の経験から、一年に約 6 週間働くことで生活に必要な費用を得ることができると知っていた。あとの残された時間は彼がやりたいと思うことのみに費やした。彼はその大部分を読書に使い、ウォルデンの独居生活中には読書以外の時間を自然生活に充てた。草刈り、炊事、パン焼きなどは彼にとって楽しい娯楽の時間であった。自分が愛した自然の中で、自然と一体になって人生を送ることにソーロウは充足感を覚えたのであろう。彼にとって商売や職業などはどうでもいいものであった。自分の考えをソーロウは次のように述べている。

As I preferred some things to others, and especially valued my freedom, as I could fare hard and yet succeed well, I did not wish to spend my time in earning rich carpets or other fine furniture, or delicate cookery, or a house in the Grecian or the Gothic style just yet. If there are any to whom it is no interruption to acquire these things, and who know how to use them when acquired, I relinquish to them the pursuit.³⁰⁾

彼は商売や労働によって獲得できる豪華な品物などには興味はなかった。彼にとっては自由に過ごす時間こそ重要なものであったし、その自由な時間に何をするかということが興味あることであった。より高い霊的な生き方をするところこそソーロウの望んだ生活であったので、彼は読書に耽り、自然に親しんだ。そして次のように言った。

In short, I am convinced, both by faith and experience, that to maintain one's self on this earth is not a hardship but a pastime, if we will live simply and wisely; as the pursuits of the simpler nations are still the sports of the more artificial. It is not necessary that a man should earn his living by the sweat of his brow, unless he sweats easier than I do.³¹⁾

ソーロウは人間は単純に賢明に生きるべきだと説いている。彼の目指す生活は複雑な物質の文明生活ではなく、単純な自然生活であった。そのように日々を過ごすことは、苦勞ではなく楽しみであると彼は信じていた。

以上のように『ウォルデン』の「経済」の章を通してソーロウの経済観を見てきたが、彼が言う経済とは一般に言われる経済ではなく彼自身の独自の経済であった。彼はこの章で始めに、自然の中で単純に霊的な生活をするために最小限に必要なものという経済に対する考えを述べた。その上で、彼自身の立場を明確にさせておくために第一章に「経済」をもってきたのである。

ソーロウにとって「経済」の章は自然へ通じる入り口であった。

注

- 1) Brooks Atkinson: *Walden and Other Writings of Henry David Thoreau*, The Modern Library, 1992, p. 4 以下, 邦訳は神吉三郎氏の訳を参考にさせて頂いた。
- 2) Ibid., p. 4.
- 3) Ibid., p. 6.
- 4) Ibid., p. 8.
- 5) Ibid., p. 8.
- 6) Ibid., p. 8.
- 7) Ibid., p. 9.
- 8) Ibid., p. 11.
- 9) Ibid., p. 12.
- 10) Ibid., pp. 12-13.
- 11) Ibid., pp. 13-14.
- 12) Ibid., p. 16.
- 13) Ibid., pp. 18-19.
- 14) Ibid., p. 21.
- 15) Ibid., p. 22.
- 16) Ibid., p. 24.
- 17) Ibid., p. 25.
- 18) Ibid., p. 27.
- 19) Ibid., p. 28.
- 20) Ibid., p. 32.
- 21) Ibid., pp. 33-34.
- 22) Ibid., p. 38.
- 23) Ibid., p. 53.
- 24) Ibid., p. 53.
- 25) Ibid., p. 55.
- 26) Ibid., p. 58.
- 27) Ibid., p. 60.
- 28) Ibid., p. 60.
- 29) Ibid., pp. 60-61.
- 30) Ibid., pp. 66-67.
- 31) Ibid., p. 67.